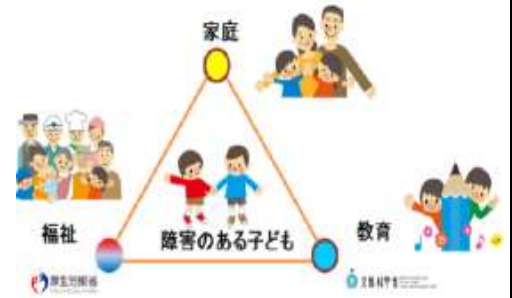


## インクルージョンとダイバーシティ②

—アフターコロナ、すべての子供たちが主体的に生きる社会—



研究員 荒巻恵子

アフターコロナと呼ばれる、コロナ禍後の時代は、私たちの生き方や社会のあり方が変わると言われます。

みんなが協力して、健康な社会を目指すためのひとりひとりの行動は、インクルーシブ社会の実現に向かいます。社会に生きる多様な人びとの存在や違いを知り、相手の文化や社会を尊重しながら、インクルーシブ社会を目指していくことになります。

インクルーシブ社会の実現を考えると、捉えておきたい言葉として「平等」と「公平」があります。図1は、同じ高さの箱が一つずつ与えられ、子供たちは箱の上に立ちます。大きい子供は壁の向こう側が見えます。中くらいの子供も向こう側が見えます。しかし、小さい子供は箱が与えられても壁の向こう側は見えません。三人の子供たちがみんな壁の向こう側が見えるように、今度は、小さい子供には2個、中くらいの子供には1個、大きい子供には0個箱が与えられました。今度は全員が壁の向こう側が見えます。図1のように、全ての人に同じ条件や、権利、報酬などの待遇が与えられた状態を「平等」と言います。一方、図2のようにそれぞれの人の特性に応じて、条件や、権利、待遇が与えられた状態を「公平」と言います。「平等」の状態では、その人に相応しいこと、その人が希望したことがあったとしても、同じ条件の状態ですから、ときに意見や主張が排他されることがあります。一方、「公平」の状態では、一人一人の特性に応じているようですが、その実現のためには、全員が納得できることが必要です。図3では子供たちの前の壁が網のフェンスに変わりました。この状態では全ての子供たちが壁の向こう側が見えます。インクルーシブ社会では、全ての人々が平等で、公平な社会の実現のために、包摂する人々、集団、組織は、「合理的配慮」をすることが求められます。ここでは箱を買ったり、網のフェンスに取り換えたりするのは、包摂する人たちの役割です。箱が欲しいかフェンスが欲しいかを、包摂させる人の意思を尊重することが大切です。図4では、大きい子供が小さい子供を肩車したり、中くらいの子供が椅子を持ってきたりと、子供たちが自らの力で、また仲間と協力して壁を乗り越えようとしています。この姿こそ、子供たちの主体的に生きる姿で、養育者や教育者は、こうした子供たちを育てることが大切な使命です。また、図5は壁がない自由な状態です。子供たちが主体的に社会に向かっていかれる自由な状態で、この状態なら、子供たちは野球がやりたくて、駆け出していかもしれません。前回も話しました、この自由の状態の中で、目的に向かって、社会に主体的に進んでいこうとする人間の姿を、ノーベル経済学者のアマルティア・センは、「エージェンシー」と呼びます。

インクルーシブ社会に向けて、みんなが共生する健康で幸福な社会の実現のためには、目標に向かう一人一人の主体的な行動が必要です。このエージェンシーの姿こそ、アフターコロナの時代を生きる子供たち、私たちの姿です。

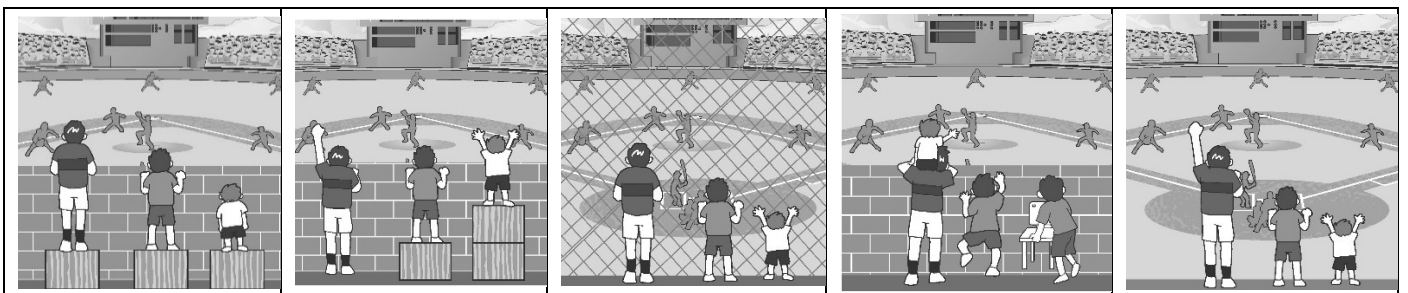


図1 平等

図2 公平

図3 平等かつ公平

図4 エージェンシーの姿

図5 自由

『インクルージョンとは、何か？—多様性社会を考える—』（荒巻恵子著、日本標準、2019年11月刊行）より引用

筆者紹介：帝京大学大学院教職研究科教授、東京学芸大学教員養成開発連携センター特命教授